

第16景

下城一円の秘史と峠山窯跡



下城山頂の石祠

一帯を含む一円地区の史跡と文化財の実証となる「一円観音堂

「一円観音堂略縁起」掛淵川の中流地域、日置、油谷の境界の要衝をなし、先大津郡の中央に位置する峠山連丘と山麓

略縁起」は今も伝承され救世観世音菩薩の御祭は床しくも今尚続けられている。

「観音堂略縁起」は今より二七四年前(宝永二年)誌された貴重な古文書である。その内容を要約すると

(一)仁徳天皇第三の皇子一圓卿がこの地に初めて入居され、四囲の勝景と賞せられ「吾名を用いて一圓村と名付べしと仰有けるに依って其後庄号を一圓とは申なり云々」一圓卿は守本尊として救世観世音を深く信仰されていた。

(二)この君が逝かれし後は臣下が護

承は風化して約八百有余年の星霜を重ねた。



一丸(一圓)卿一門の供養塔

(四)萩藩主毛利秀就公の寛永八年、里人神兵衛なるものの夢枕に立つ

新版 日置十八景

持していたが其家断絶して勿体なくも土中に隠れ給うこと久しく、知る人もなかった。

(三)奈良時代の天長年中、郷侍の宗貞某なるものこの地を城山と称し要害堅固に築地を築き矢狹をつくり二条の唐堀を山腰に廻らす等城塞を築造し、上城々主と相対立した。初の頃は両軍共勇氣を振い対峙していたがその中上城軍は計をめぐらし旗さしもの、馬印をへんぼんとして風にひるがえして急襲した所、下城軍は戦わずして逃走、切腹、降参して落城し軍門に降った。その後古戦場は訪ねる人もなく、伝

た救世観世音菩薩が「吾は此地に有縁の観音なり土中にあること久し、早く若宮の壇を掘尋ねよ」と告げられた。村中相集いお告の通り掘れば観音像が出現、勿体なくも作業中鏝に当りお首に疵されたので清水池にて洗い奉り一字建立して霊像を安置した(下城山の西麓であろう)

一七日の間念佛修行するものならば現当の利益全からん」と村人は早速手厚く仏事を営だ所不思議や牛馬の不順は絶え地下は愈々繁昌した。これは偏に、観音菩薩の御利生なれば尤も尊敬退転有べからず加之往古より靈告不思議の化益は挙げて算るにいとまあらず仍之已後堂宇修理の儀は申に及ず永代佛事執行懈怠なく相宮へき事肝要なりと誌されて居る。

(一)若宮祠……下城山の山頂に大歳祠、豊前坊と並んで石の御室があるがこれが仁徳天皇を祀る若宮様である(向って一番右)。仁徳天皇時代は大和朝廷の国内統一が略完成し天皇はじめ豪族達は富と権力を象徴する壮大な古墳を各地に造った。近くの長行部落にも箱式石棺の古墳があり一円卿云々の物語りの片鱗が伺われる。

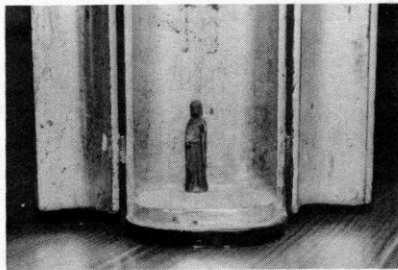
(二)峠山の須恵器窯跡(文化財として指定)また大陸との交通や朝鮮半島への直接進入、帰化人の渡来等により大陸文化の伝来もこの頃であった。峠山の須恵器窯は直接か間接か朝鮮の陶窯型式が伝えられたものである(出土品は公民館に保管)。当時としては先進国である朝鮮半島に最も近い油谷湾沿岸にいち早くその文明が伝来され、日置油谷地区は大陸文明の窓口として栄えたと考えられる。一圓卿が日置の地に

(三)一丸(一圓)卿の供養塔
火葬場へ行く道の東側の山は現在墓地であるが到るところに五輪石が見られる。その墓地の古松の根方に数基の宝篋印塔があり一丸(一圓)卿一門の供養のために建てられたものと伝えられている。

(四)観世音菩薩と略縁起
右の佛像は金属製であるが、ごく小さく小指程もあろうか。現在村田家に略縁起と共に大切に護持されている。

(五)その他
観音池、千疋塚、空濠、堂跡等縁起中に誌されている史跡が今尚歴然と残されていることは驚くべきことである。羽仁記

○攻防の悲史を伝えて
○語りつく秘佛尊し蔓珠沙華
中野木鶏



観音様